

【注釈】

拾遺愚草、下、部類歌注釈

春・

2049
2059

小田 剛

内裏哥合夜歸鴈

2049 つれもなくかすめる月のふかきよに／かずさへ見えずかへるかりがね

「訳」冷淡にも霞んでゐる月の深い夜に、数

までは見えないで（北へ）帰って行く雁であるよ。

〔語注〕○夜歸鴈（題） 他、③132 壬二 2088 のみ。

○つれもなく 「友・つれあいもなく」では

なかるう。①1 古今 662 「冬の池にすむには鳥の

つれもなく…」（みつね）。○かへる・かり

①1 古今 412 「北へ行くかりぞなくなるつれて

こしかずはたらでぞかへるべらなる」（羈旅、

よみ人しらず）。○かへるかりがね 八代集

八例、初出は後拾遺71。2051 後出。

〔本歌〕①1 古今 191 「白雲にはねうちかはしと

ぶかりのかずさへ見ゆる秋のよの月」（秋上、

よみ人しらず。「本歌」（全歌集）。②4 古

今六帖 300

▽下句かの頭韻（及び末句か音、全体としての

か音）。有名な本歌をふまえて、秋には白雲に

羽を動かして飛ぶ数までも、秋夜の月の中に見

えた、しかし、今、つれなく霞んでゐる春の月

の夜更けに雁が帰って行くが、数は見えず分か

らないと歌う。本歌は来雁（秋）であるが、

2049 2049 には

近い③133拾遺愚草²¹⁵¹「花の香もかすみてしたふ有明をつれなくみえて帰る雁がね」(春「：曉帰雁」)、新古今所収歌の③133同¹⁹⁵⁰「おほよどのうらにかりほすみるめだに霞にたえて帰る雁金」(最勝四天王院名所御障子歌「大淀浦」。

①8新古今¹⁷²⁵がある。

全歌集「建保三年二二三三月二十一日の影供三首歌会での詠か」、定家⁵⁴歳。安東¹¹⁰頁「有心の風情を添える言い回しにとどまって、変化に向う目はない。」。赤羽²⁵⁴頁「肉眼では見えないけれども霞の中やおぼろ月夜の中を帰ってゆく雁の姿は、心の眼に捉えられており、ここには広い意味での視覚、自在な視点が見出されている。それはとりもなおさず主体を離れた普遍的な目なのであった。」、同²⁹¹頁「：かす：数さ：かへ：句中にある同音反復よりはるかにリズムカルであり、イメージ喚起や気分の盛り上げの効果があるのは、句頭にある押韻が音

数律と協調しているからであろう。これは押韻と律格の関係が密接であることを示している。」

2055 参照。

〔参考〕③125山家⁶⁰⁰「つれもなくたえにし人へかりがねのかへる心とおもはましかば」(恋

「寄帰雁恋」)

〔類歌〕③132壬二13「詠むればくもるともなき

春のよの月に霞みて帰る雁がね」(初心百首、

春。⑤217家隆卿百番自歌合²⁰)：2049に近い

④18後鳥羽院¹³²³「あか月のこれもならひのわか

れぞとつれなく見えてかへるかりがね」(日

吉卅首御会、春)

④22草庵⁹⁹「面影を又やしのばん春のよの月に

かすみて帰るかりがね」(春上)

海邊歸鴈

2050

さとのあまのしほやき衣たちわか^{なれ}なれ
しもしらぬはるのかりがね

「訳」里の海士の（着馴れた）潮焼く作業着の如く、別れて馴れることを知らない春の（帰）雁であるよ。

〔語注〕○海邊歸鴈（題） この歌のみ。○

さとのあま 歌枕（古注）とも考えられるが、『歌枕索引』には項目はなかった。○のあまのしほやき衣 ①ー古今 758「すまのあまのしほやき衣をさをあらみ…」（よみ人しらず）。

○しほやき衣 八代集二例・古今 758、新古今 1210。

○たちわかれ 八代集十二例。「たち」は「立ち」に「しほやき衣」の縁語「裁ち」を掛ける。（全歌集）。①ー古今 365「立ちわかれいなばの山の峰におふる…」（在原行平）。○なれ 「しほやき衣」の縁語。（全歌集）。「着古すの意の「褻れ」と「馴れ」とを掛ける。「衣」の縁語。」（明治・続後拾 56）。「汝」か。○末句 末句の一つの型。③ 131 拾玉、③ 132 壬二集に用例が多い。

▽この歌は行間記入で一行。初句字余（あ）。

「里の海人の潮焼衣」の「裁ち」と同音の「立ち」別れて、春雁は帰っていくとて、その土地に馴れることを知らないと歌う。なお定家の歌ではあるが、「拾遺愚草員外之外」⁴⁰¹⁰・⑤ 206 賀茂別雷社歌合 9「浦にたくもしほの煙立ちわかれ霞のなみにかへる雁がね」（「海辺帰雁」定家）の詠が存する。① 16 続後拾遺 56、春上「春歌中に」前中納言定家、第三句「立ちかへり」。

⑤ 216 定家卿百番自歌合 11、六番、左、或所歌合、無判詞。C 471「里のあまの」、四国にある名所也。海人などもかつすみて物がなしき浦也。雁の立わかる事をも、心ある人もなければ哀をもしらじと也。かりも又わかるゝとも心はめめじと也。」「一歌枕名寄は阿波国に掲げるが、それまでの歌枕書には見えない。」・D 107。摘抄 17「此歌は、所をかりて風情をしたてたる歌也。彼里の海士

は、家一・二つありて、世にたぐひなく悲しき所也。しかるあひだ、所がら住ぬるあま人も猶心なく侍よしをいひたてたる歌也。…、「一

…歌枕としては「歌枕名寄」「宗祇名所方角鈔」などに見え、…」。六家抄²⁷⁷「里の海士名所也。阿波也。序哥。なれしもしらぬと云むためなり。帰鴈をおしむ心也。なれしとよめるはきなるゝ心。なれ衣とよめるもき馴るゝ心也。塩やき衣なれなばかとよめるも馴るゝ心也。」全歌集「参考」・万葉²⁶²⁹²⁶²²「志賀の海人の塩焼き衣なれぬれど恋といふものは忘れかねつも」

（巻第十一。「参考」（明治・続後拾56）、「詠出年次未詳」。明治・続後拾56「一帰雁」。

〔参考〕②4古今六帖³²⁸⁷「いせのあまのいほやき衣なれてこそ人のこひしきこともしらるれ」（第五「しほやきゝろも」）

〔類歌〕①22新葉⁵¹⁶⁵¹⁵「さとのあまのいほなれ衣忍べとてからき別のかたみにぞやる」（離

別、文貞）…2050に近い

①22同⁵¹⁷⁵¹⁶「里のあまの塩なれ衣とどめてもながらへばこそかたみともみめ」（離別「返し」

妙光寺内大臣母）

②16夫木⁵⁸⁰⁵「さとのあまのいほやき衣うつおもまどほにひびく風のつてかな」（秋五、擣

衣「…、擣衣幽」家長）…一、二句同一

⑤²⁴⁷前撰政家歌合75「すまのあまのいほやきゝろもなれにしもしらぬ浪ちに春ぞ暮行く」（後春、茂成）…2050によく似る

賀茂社鷗哥合^{朝日} 曉歸鴈

²⁰⁵¹ 花のかもかすみてしたふありあけを／つれなく見えてかへるかりがね

〔訳〕花の香も霞んでいて（雁が）慕う有明をそっけなく見えて帰って行く雁であるよ。

〔語注〕○曉歸鴈（題） 他、③132壬二²¹³¹（後

述）、²¹⁷⁹のみ。 ○花のか 八代集十一例。

○花のかも ① 2 後撰 69 「句こき花のかもてぞ
しられる…」。 ○したふ 八代集十一例。

○ありあけを ② 4 古今六帖 2820 「…やちよも
ここにありあけをせよ」。 ○つれなく見え

① 1 古今 625 「有あけのつれなく見えし別より曉
ばかりうき物はなし」(恋三、みぶのただみね。

「参考」(全歌集)。 ② 古今六帖 362。 同 3034。 ②

8 新撰朗詠 393。 ③ 13 忠岑 154)。 ○末句 2049 前
出。

▽桜の香も霞んでいて思い慕う有明を、雁は薄
情にも北へ帰って行くと歌う。 2051 によく似た二
つ前の詠・ 2049 「つれもなくかすめる月のふかき
よに／かずさへ見えずかへるかりがね」(春)、

新古今所収の ③ 133 拾遺愚草 1950 「おほよどのうら
にかりほすみるめだに霞にたえて帰る雁金」(最
勝四天王院名所御障子歌「大淀浦」。 ① 8 新古
今 1725 273。 ⑤ 261 最勝四天王院和歌 326) がある。
六家抄 278 「うちかすみたる有明の時分、帰鴈を

月殿も花殿もしたふ心也。つれなきは有明のつ
れなくにてよめる也。雁の難面事也。在明を難
面とよみならはしたる也。」

全歌集「この賀茂社歌合はいつの催しか、未詳。

「御幸」は後鳥羽院御幸か。 赤羽 306、 307

頁「第二句と第五句に頭韻がある場合…ある程
度の統一感はあるが、韻律の効果は強くない。

…かす…かへ…部分的なイメージの重層とか、
気分的な交響のようなものがあつて、それが一
首のアクセントになっている。」

「参考」⑤ 92 祿子内親王家歌合(庚申) 5 「か
きつらねかへる雁がね霞わけ花のみやこの花
を見すてで」(「帰雁」中務)

〔類歌〕① 22 新葉 1022 1019 「きぬぎぬの別もかくや
いたはれん有明の月に帰るかりがね」(雑上

「帰雁雁を」嘉喜門院大藏卿)

③ 132 壬二 2131 「たがしのぶ袖の別の有明をつばさ
にしりてかへる雁がね」(春「暁帰雁」)

④ 18 後鳥羽院¹³²³ 「あか月のこれもならひのわか

れぞとつれなく見えてかへるかりがね」(日

吉卅首御会、春)：下句同一

④ 22 草庵¹⁰⁰ 「山こゆるほどもしられずかすむよ
の有明の月にかへるかりがね」(春上「暁婦

雁」)

暮山花

2052 たが春のくものながめにくれぬらむ／や
どかる花の峯のこのもと

〔訳〕 一体誰の春の雲の眺望として日は暮れは
ててしまうのであろうか、宿を借りる花・桜の
峯の木の本(の私を)。

〔語注〕○暮山花(題) 他、③ 132 壬二²¹¹、③

133 拾遺愚草¹⁸⁴⁰ 「たれと又雲のはたてに吹きかよ

ふ嵐のみねの花をうらみん」(院句題五十首)、

③ 130 月清⁹⁶¹ (同) のみ。 ○くものながめ 新

編国歌大観①く⑩の索引に、他はなかった。

○くれぬらむ ⑤ 213 内裏百番歌合(建保四年)

70 「日ぐらしのなく山かげはくれぬらむ^ん夕日

かかれる峰のしら雲」(夏、知家。① 19 新拾遺

447)。 ○やどかる花 ④ 38 文保百首¹⁶¹³ 「あか

なくにみつつをゆかん玉つしまやどかる花には

るはくるとも」(春、為藤)。 ○峯のこのも

と 新編国歌大観①く⑩の索引では、他は⑧ 10

草根(正徹) 3033 「…すすむか涼し峯の木の本」

のみ。

▽第二、三句ぐの頭韻。三句切。峯の花の木下

で宿を借りた私のことを、遠くから見ている人

は、いったい誰の春の花雲のながめとして暮れ

たのかと思う、と歌う。『全歌集』は、「遠く

では誰がこの花を雲と眺めているうちに春の長

い日は暮れたのだろう。私は峯の花の木の下に

宿を借りる。」と、「誰」を他人とする。① 14

玉葉¹⁵³、春下「暮山花を」前中納言定家、第三

句「…らん」。⑤ 329 桐火桶¹²⁸ (作者)、初句「た

がさとの」、下句「宿かる峰の花の木の本」。

⑥ 31 題林愚抄 1073、春三、暮山花「玉」定家、初句「誰が春の」、下句「宿かるみねの花の木の本」。

⑩ 115 仙洞歌合（後崇光院 宝徳二年）90判、初句「たがさとの」、下句「やどかるみねの花の木のもと」。

⑩ 206 歌林良材 207、初句「たが里の」、下句「やどかる嶺の花の木の本」。

C 472 「我は花の木のもとにやどをかり、かゝるおもしろさをも外よりは雲とこそながむらんと也。」・D 108

玉葉全注釈「参考」・① 3 拾遺 781 「あしひきの山こえくれてやどからばいもたちまちていねざらむかも」（恋三「たびの思ひをのぶと」・石上乙麻呂）、「補説」 参考拾遺集詠の発想から展開された一首か。「たが春の雲のながめ」とは「立ち待ちていねざらん」妹のながめであろうか。妖艶きわまる叙景。」

赤羽 303 頁「第二句と第三句に頭韻がある場合／

一、三句切で第三句がとくに強調される。…雲の…くれ…」。

攝政殿にて哥を詩にあはせらるべしとておなじ題を二首よませら／れし

初出此處と有此事
／花添山氣色

2053 春の花の雲のほひにはつせ山／かはらぬ

いろぞゝらにうつろふ

「訳」春の花の雲の美しさに初瀬山（では）、変らぬ色が空に写ろっているよ。

「語注」○花添山氣色（題） 他、③ 132 壬二 212、

2122 のみ。○春の花 八代集三例。① 3 拾遺 1146

「…春の花にもおとらざりけり」（もとすけ）。

○雲のほひ 新編国歌大観① ⑩の索引を

みると、他は⑦ 123 伏見院 478 「とへかしなくもの

にほひもしるからん…」、⑧ 8 沙玉（後崇光

院）284 「…はれぬ雪げの雲のほひに」だけで

ある。○はつせ山 八代集六例、初出は金葉

51。 2055 後出。 ○かはらぬいろ ① 2 後撰 864 865

「…かはらぬ色ときかばたのまむ」（よみ人しらず）。

▽初句字余（母音ナシ）・赤瀬信吾『論集 藤原定家』「藤原定家の和歌表現——字余り句の機能をめぐって——」68頁に挙げられている。

2053 は、初瀬山では、春の桜の雲の美しさが見え、花雲と変らない花桜の色が空に写ろって——移ろってか——見える」と歌う。定家に③133拾遺愚草912「いつも見し松の色かははつせ山桜にもる春の一しほ」（正治…、春。④31正治初度百首1315）がある。

539 「雲の匂ひ」とは花也。雲に映じて匂ひたる也。「かはらぬ色」とは、雲と花と也。雲も花もひとつにうつろひたる此山の眺望たるべし。」B 376 「花緑山気色雲の匂ひとは花の雲に映して匂ひたる也かはらぬ色とは雲と花との事也 花も空の雲にうつろひ雲も花にうつろひ

たるさまにや此山の眺望なるへし」、B 25 「花の雲匂やかにして空の雲にひとしく満山うつろひあひたる心とみるへき歟」。摘抄18「この「雲の匂ひ」といへるは色の事也。にほひの事にてはなし。花のさかりには、花は雲にまがひ雲は花にまがひ侍り。花は、ちらんとは色はふかくなるものなり。…本歌へ春霞…「私注——①古今69「春霞たなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく」（春下、よみ人しらず）」…」。六家抄279「花の色も匂ひも雲にうつりたる也。」

全歌集「建仁三年（一一三三）八月一日良経家詩歌合（散逸）での詠。」、定家42歳。

〔類歌〕③130月清718「はつせやまうつろふ花に春くれてまがひしくもぞみねにのこれる」（院

初度百首、春。①8新古今157。④31正治初

度百首422）

③130同817「はつせやま花に春かぜふきはててく

もなきみねにありあけの月」(千五百番百首、

春。① 21 新続古今 210。② 16 夫木 1578。⑤ 197 千

五百番歌合 512)

③ 132 壬二 2090 「はつせ山うつろはんとや桜花色かはり行く峰のしら雲」(春「…、春歌」。①

12 続拾遺 95。⑤ 213 内裏百番歌合(建保四年)

39) … 2053 に近い

2054 たますだれおなじみどりもたをやめの／そ

むる衣にかほるはるかぜ

〔訳〕玉簾と同じ緑色(の山)も、たおやめの染めている衣・山の美景に美しく輝く春風であるよ。

〔語注〕○たますだれ 八代集二例、① 3 拾遺

663 「たますだれいとのかえまに人を見て…」(よ

み人しらず)、同 898。○おなじみどり ③ 130

月清 806 「のもやまもおなじみどりにそめてけり

かすみよりふるこのめはるさめ」(千五百番百

首、春。① 15 続千載 63。⑤ 197 千五百番歌合 183)。

○たをやめ 「たわやめ」共に八代集にない。

万葉 585 582 「ますらをもかく恋ひけるをたわやめ

の…」、同 3775 3753 「逢はむ日の形見にせよとたわ

や女の…」⑤ 421 源氏物語 443 「たをやめの袖に

まがへる藤の花…」③ 133 拾遺愚草 1806 「たをや

めの袖かもみぢかあすか風…」(院五十首)。

○たをやめの ③ 132 壬二 1242 「たをやめの春た

つけふの衣より匂ひそめたる花の色かな」(為

家卿家百首、春)。③ 132 同 1555 「たをやめのうち

たれ髪の花かづら曙かけてにほふ春風」(九条

前内大臣家百首「春曉花」)。④ 40 永享百首 117

「たをやめの春のころもをおるはたやにひくは

まゆの青柳の糸」(春「春雨」浄喜)。⑤ 213 内

裏百番歌合(建保四年) 14 「青柳の春のけしき

もたをやめのかざしの玉の露ぞみだる」(春、

右大臣)。○かほる 八代集十二例、初出は

金葉 59。○かほるはるかぜ ③ 127 聞書集(西

行) 1「こずゑにかねてかをるはるかぜ」など。

▽緑の玉簾の如き、緑の山のすきまからたおやめの染めた衣を思わせる、花が咲き、春風が薫ると歌う。古注では難解歌としている。同じ定家に③133拾遺愚草¹²¹⁰「みしま江の浪にさをさすたをやめの春の衣の色ぞうつろふ」(内裏百首、春「三島江」)。②16夫木¹⁶⁵⁹⁵。④33建保名所百首¹¹¹がある。②16夫木¹¹⁹⁵、春四、花「後京極撰政家詩歌合、花添山気色、詩歌合初^五」前中納言定家卿。②16同¹⁶⁵⁹⁶、雑十七、婦人「後京極撰政家詩歌合、花添山気色」同「前中納言定家卿」。⑤336愚問賢注²⁵、定家卿、第二句「…に」。

⑤344東野州聞書¹⁵¹、京極黃門(定家)。

五40「此歌、前々より聞えがたき歌也といへり。

山と云字も花と云字もなく、気色ばかりをいへり。まことに難解難入の歌なり。…」。

B 377「同題此歌は気色といへるはかりの姿侍る歟余字は一向にのそかれたり是によりて此歌の心難

知解難入の歌也強て心をいふに先歌の総別春の山の花媛艶せる姿を美女にたとへたり…」。

B 26「X」。C 473「むすび題のよみやうの手本也。秘歌也」。D X。六家抄²⁸⁰「花山のきしよくをそふと云題にてよめる。花に山の景色をます心也。同じみどりにてすだれはみどりなる物なれば、山のみどりをもつて也。山の心かほるにて花美人に匂ふと云事あり。すだれのひまの花をみてたをやめの衣のやうなる也」。

全歌集「緑の玉簾の中から現れるたおやめの美しく染めた衣のように、同じ緑色の山を彩って花が咲き、春風が薫っている。参考「和風…」私注―和漢朗詠⁷¹⁵「和風先導薫煙出 珍重紅房透翠簾」(下「妓女」)、「右に同じ」・前歌²⁰⁵³。

佐藤・研究⁴⁴³頁「漢詩文受容：朗64〔私注〕②6和漢朗詠64「誰家碧樹 鶯啼而羅幕猶垂 幾處華堂 夢覺而珠簾未卷」(春「鶯」)「

正治二年三月左大臣家哥合あひあひ曉霞

2055 はつせ山かたぶく月もほのく／＼と／＼かすみ

にもる、かねのをと哉

〔訳〕初瀬山（においては）、傾く月もほのぼのとして、ほのぼのと霞に漏れてくる鐘の音であるよ。

〔語注〕○正治二年 1200年、定家39歳。○曉

霞（題） 他は歌合〔440〕「寿永元年以前」或所歌合雜載②、③130月清1020、⑦63親宗4のみ。

○はつせ山 2053前出。かたぶく月 ②6和

漢朗詠417「一片西傾之月」（「曉」）。②8新撰朗詠216「月西傾」。○ほのく 八代集九

例。○ほのく ①1古今序Ⅱ409「ほのぼのと明石の浦の朝霧に…」（よみ人しらず）。

○もる、下二段は八代集一例・「もれ出づ」で新古今413、が四段は多い。○かねのをと

八代集十例、初出は後拾遺1211。

▽下句かの頭韻。腰句は上下にかかる。長谷寺

の初瀬の鐘の音。初瀬山を見ると、傾いて行く、

夜明け近い月もほのぼのといった感じで、ほの

かに長谷寺の鐘の音が霞より漏れ出てくると歌

う。同じ定家に③133拾遺愚草936「けふこそは秋

は、はつせの山おろしにすずしくひびく鐘の音か

な」（正治…、秋。④31正治初度百首1339）があ

る。〔類歌〕が多い。①17風雅30、春上「後京

極摂政、左大臣に侍りける時、家に歌合し侍り

けるととき、曉霞といふ事を」前中納言定家。⑥

17閑月49、春上、前中納言定家。

六家抄282、歌のみで、注文ナシ。

全歌集「良經家十題二十番撰歌合（散逸）での

詠」。風雅全注釈「参考」・①6詞花112110「ゆ

ふぎりにこずゑもみえずはつせ山いりあひのか

ねのおとばかりして」（秋「霧をよめる」源兼

昌）、③132壬二916「時くればこれも哀はしられ

けり霞にもるはるこまのこゑ」（百首文治三年十一

月春）。

安田 358 頁「すぐれた作品が撰ばれているのである。いずれも、『玉葉集』に撰ばれた歌と同様、清新な感覚を持った、構成の確かな歌であり、粘り強い調べを有して対象への切り込みの深さを示している。」赤羽 291 頁「第二句以下の三句に亘る頭韻であるが、中間に一句を隔てているものである。…かた…／かす…かね…」2049 参照、同 382 頁「初瀬の尾上の鐘であるが、…月が傾き、…時の鐘の音である。」

〔類歌〕① 11 続古今 82 「ほのぼのとかすめる山のしのめに月をのこしてかへるかりがね」

（春上「帰雁をよめる」衣笠前内大臣）

① 21 新続古今 1716 「泊瀬山月にさびしき鐘の音をひばらにおくる夜半の秋風」（雑上、荒木田

経頭）

② 13 玄玉 348 「はつせ山かはらのこけに霜ふけてさびしくひびく鐘の音かな」（天地歌下「…、

仏寺歌とて…」信光）…一、末句同じ

③ 131 拾玉 4497 「はつせ山月の光にあまりゆく心をせむるかねのおとかな」（百首題「月」）…

一、末句同じ

④ 15 明日香井 1048 「おきまよふしもになれてやはつせ山月にもひびくかねのおとかな」（影供

歌合「古寺月」）

⑤ 182 石清水若宮歌合 232 「泊瀬山ふかくや雪もつもるらむをのへにしづむ鐘の音かな」（「雪」

経通）…一、末句同一

⑤ 342 落書露頭 20 「初瀬山月は高根にかたぶきて嵐に残る鐘の一こゑ」

朝花

2056 世のつねの雲とは見えず山櫻／けさやむかしのゆめのおもかげ

〔訳〕世の常の雲とは見えないで、山桜（よ）、今朝は昔の夢の面影（を）ほうふつとさせることであるよ。

〔語注〕○朝花（題） 他、③ 132 壬二 1352、

④ 11 隆信 53（「あしたのはな」）、54（「おなじ心を」のみ。 ○世のつね 八代集十例。

○世のつねの ① 2 後撰 669 770 「世のつねのねをしなかねば逢ふ事の…」（藤原治方）。 ○雲

「山桜は雲のように満開」（全歌集）。 ○

山桜 ① 1 古今 51 「やまざくらわが見にくれば

春霞…」（よみ人しらず）。 ① 4 後拾遺 84 「を

らばをしをらではいか山ざくらけふをすぐさ

ずきみにみすべき」（春上、源雅通）。 ④ 32 正

治後度百首 71 「白雲はいくへもこめよ山桜見え

ぬも花の色ならぬかは」（「花」季保）。 ○ゆ

めのおもかげ ③ 133 拾遺愚草 1526 「…たえてつれ

なきゆめの面かげ」など。

▽三句切。山桜は尋常の雲とは見え、今朝は

昔の夢の面影を思わせると歌う。巫山の神女の

面影なら、① 8 新古今 38 「春の夜のゆめのうき

橋とだえして峰にわかるる横雲のそら」（春上、

定家）の世界でもある。⑤ 248 和歌一字抄 183、朝

「^{朝花}朝花」。⑥ 11 雲葉 142、春中「後京極摂政家

十首歌合に、朝花」前中納言定家、第二句「も

のとは…」。

C 474 「ふざ^みさんの神女、あしたには雲となり、

夕には雨となりて、陽台のもとにあらんと

いひて、亭王^{みづみ}の夢に見えし事をおもひよそへり。

文選の古事也。花の雲のこれほどおもしろき

は、神女の化したる雲かと也。花をあ^あいしたる

歌也。・D 109。摘抄 19 「尋常の雲ともみえず」

は、花は雲と見、雲をば花とみるもの也。古今

集の序に、「春の朝よしの山の桜をば人丸が

心には雲かとのみなむおぼえける」とあり。さ

れども、この明ぼの山く^くにさきいづる花の

けしき、いかにして只大かたの雲とは見侍るべ

きと也。…」。六家抄 283 「九六古新註〇けうず

るうへからかくよめる也。右、梁の武帝契をな

してひる寝の夢に、朝には雲と成、夕には雨と成

んとの其面影にてよめる也。巫山神女と云し也。」

全歌集「…今朝美しく咲き匂っているさまは、昔楚の襄王が夢に見た巫山の神女の面影をとどめた雲ではないかと思われる。▽高唐賦の心がある。↓二七〇補注。二〇五五と同じ時の詠。」。赤羽⁴⁶⁴頁「おもかげ」は…定家の場合それは、浜木綿のように幾重にも隔った雲の底の面影として空間的な構成の中に組入れられ、重なり合う山や雲と同次元のイメージとして定着される。…「夢の面影」にも定家の独創が見られる。前者は、『文選』「神女賦」の「朝雲」の面影であらうし、

「類歌」①15続千載¹⁶⁷⁵「をらずとも人にかたらん山桜みる面かげを家づとにして」(雑上、

祝部行氏)

建保三年五月哥合^{春山朝}

このねぬるあさけの山の松風は／霞をわけ

て花のかぞする

〔訳〕この寝てしまった朝明けの山の松風は、霞を分けて花・桜の香がすることよ。

〔語注〕○建保三年¹²¹⁵年、定家⁵⁴歳。○春

山朝(題) 他、③¹³²壬二²¹²⁹、③¹³¹拾玉⁴⁰¹²、⁴⁰¹³、

⁴⁰³¹く⁴⁰³³(後述)のみ。○あさけ 八代集五例。

²⁰⁴⁸前出。○松風は ②⁴古今六帖³⁴⁰³「まつのおとをことにしらぶるまつかぜは…」。○霞

をわけて ①²後撰⁹⁰「山高み霞をわけてちる花を雪とやよその人は見るらん」(春下、よみ

人しらず)。○花のか 八代集十一例。

〔本歌〕①¹古今¹⁰³「霞立つ春の山べはとほけれど吹きくる風は花のかぞする」(春下、あ

りはらのもとかた。②²新撰万葉²⁹。②⁴

古今六帖³⁸³。⑤⁴寛平御時后宮歌合²⁹／

①³拾遺¹⁴¹「秋立ちていく日もあらねどこのねぬるあさけの風はたもとすずしも」

(秋、安貴王。「本歌」(全歌集、明治・

新統古¹²⁹。万葉¹⁵⁵⁹。② 6 和漢朗詠²¹¹。

③ 8 敏行²⁰。和・志貴皇子

▽二つの本歌をふまえて、古歌では立秋となつてさほど日が経っていない折には袂が涼しいと歌うが、春においては、この寝起きの朝明けの、遠い春山より吹き来る松風は、立つ霞を分け進んで花の香がすると歌う。① 21 新統古今¹²⁹、春下「建保三年歌合に、春山朝といふ事を」前中納言定家。⑤ 212 院四十五番歌合 4、建保三年六月二日、春山朝、二番、右、侍従藤原朝臣、「左方申曰、あさ明の山の松風、花の香をさそひて霞をわけん、まことにすてがたくなん侍る、左は、とほき山べとおき、右は、このねぬるあさけのなどいひて、ともに古歌をおもへり、なぞらへて為持」・「左^持」

六家抄²⁸¹「昨日までは句はぬが、咲そめたる也。」
安田¹³⁴、¹³⁵、¹³⁷頁「五十四歳の頃の作品に万葉

調のものが目立つということである。…（参考歌）秋たちて…（『万葉集』安貴王）／秋たちて…（『拾遺集』安貴王）…これらの歌は、『万葉集』の作…を本歌としているか、あるいは少なくとも、その影響を受けていると思われるので、…

〔類歌〕② 15 万代²¹⁷「このねぬるあさけのかぜもこころあらばはなのあたりをよきてふかなん」（春上「…、朝花と…」入道前摂政左大臣）

③ 131 拾玉⁴⁰³³「春の今朝はなにはいとふ山風の霞を分けてのどかにもゆく」（春山朝）

④ 14 金槐³⁵「このねぬるあさけの風にかをるなり軒ばの梅の春のはつ花」（春「梅花風ににほふ…」）

④ 18 後鳥羽院⁵³⁶「此ねぬるあさけのかぜのをとめ子が袖ふる山に秋やきぬらむ」（建保四年二月御百首、秋）

建仁二年三月三。躰とかやおほせられて／
めされし春哥

2058 花ざかり霞の衣ほころびて／みねしろたへのあまのかぐ山

〔訳〕花盛りであり、（あたり一面の）霞の衣がほころんで、（見えるのは）峯はまっ白の天の香具山であることよ。

〔語注〕○建仁二年¹²⁰²年、定家41歳。○花ざかり 八代集十四例。①2後撰121「花ざかりまだもすぎぬに吉野河…」（よみ人しらず）。

○霞の衣²⁰³⁰ 前出。①1古今23「はるのきるかすみの衣ぬきをうすみ…」（在原行平）。②10続詞花19「春風に霞の衣ほころびてたえまに見ゆる青柳の糸」（春上、源季遠）、④11隆信583「春がすみ霞のころもほころびてしのぶのみだれあらはれやせん」（恋四）…共に二、三句同一。

○ほころび 八代集八例。①1古今26「…みだれて花のほころびにける」（つらゆき）。○あ

まのかぐ山 八代集五例、初出は詞花379、あとすべて新古今。他、「あまのかぐ山」八代集一例・千載609、他②4古今六帖858も「…かぐ山」。

▽花ざかりで、広々としていた霞（衣）もほころんで、峯のまっ白な天の香具山が見えると歌う。いうまでもなくもとに、①8新古今175「はるすぎて夏^{せま}きにけらし白妙^{しらたけ}の衣ほすてふ天のかぐ山」（夏、持統天皇。「参考」（全歌集））。②1万葉28。②16夫木⁸²⁹⁰。⑤301古来風体抄16）がある。「類歌」が多い。②16夫木¹¹³⁶、春四、花「建仁二年三体和歌」前中納言定家卿。⑤259三体和歌19、定家朝臣、末句「…かぐ山」。

六家抄284「かすみのひまにみえたる花を興じて也。みね白妙は花の盛を也。」

全歌集「三体和歌での詠。春夏は「大ニフトキ歌」として詠めと指示されていた（明月記）」。

安田464頁『歌舞髓脳記』に見えるもの」。

〔参考〕④26堀河百首153「春風に霞の衣ほころ

びでぬひさへみゆる山ざくらかな（春「桜」
師時）

〔類歌〕②16夫木¹¹³⁹「さほひめのほすや衣の白
妙に花咲きにほふあまのかぐ山」（春四、花、

：知家）

③130月清⁸⁶⁷「くもはるるゆきのひかりやしゐた
へのころもほすてふあまのかぐやま」（千五

百番百首、冬。⑤197千五百番歌合²⁰¹²）

③132壬二¹⁹⁹²「しろたへの衣ほすなり郭公あまの
かぐ山おもはへてなけ」（西園寺三十首、夏）

③132同²³⁹⁷「いまよりの秋かぜたちぬしろたへの
衣吹きほすあまのかぐ山」（下、秋）

④2守覚¹⁷「滝のうへのみふねの山の花ざかり
みねにも尾にもかかるしらなみ」（春「桜」）

④31正治初度百首⁶¹³「峰ははなふもとはかすみ
久かたのくもゐにみゆるあまのかぐやま」

（春、慈円）

④33建保名所百首³⁰⁶「夏くれば霞の衣たちかへ

て白妙にほす天のかぐ山」（夏「天香九山」）

：2058に近い

④40永享百首⁴「春はきぬ霞の衣しろたへの雪
にかけほすあまのかぐ山」（春「立春」兼良）

：2058に近い

④41御室五十首⁴⁶²「山の葉も霞の衣立ちかへて
今朝はひとへにみねのしら雲」（夏、有家）

⑤205鴨御祖社歌合⁵「山かげの霞のころもほこ
ろびで春風さむきあさあけの袖」（「山家朝

霞」通光）

2059 秀能が人くによませ侍し五首之中花哥
おほかたのまがはぬくも、かほるらむ／さ

くらの山の春のあけぼの

〔訳〕おおよその桜と見紛わない雲も美しく輝
いているのであろうよ、桜の山の春の曙は。

〔語注〕○おほかたの 八代集十三例。²⁰⁶⁴後出。

①ー古今¹⁸⁵「おほかたの秋くるからにわが身こ

そ…」（よみ人しらず）。① 4 後拾遺 96 「さくら
 ばなにはふなごりにおほかたのはるさへをしく
 おもほゆるかな」（春上「花を…」能宣）。③ 33
 能宣 84 「ちりまがふはなをしむとおほかたの
 はるさへけふにくれぬべきかな」（「三月尽を
 しむところ」）。⑤ 44 内裏歌合（寛和二年）7
 「さくらばなちりだにせずはおほかたのはるを
 ばをしとおもはざらまし」（「桜」能宣）。○
 かほる²⁰⁵⁴ 前出。○かほるらむ ④ 41 御室
 五十首⁴⁵⁸ 「を初瀬の麓のいほもかをるらむさく
 ら吹きまく深山おろしに」（春、有家）。○さ
 くら（の山）③ 100 江帥 351 「みかみなるさくら
 のやまのはなざかり…」など。○春のあけぼ
²⁰⁴⁴ 前出。③ 130 清 410 「かすむよりみやまに
 きゆるまつのゆきのさくらにうつる春のあけぼ
 の」（治承題百首「花」）。③ 131 拾玉⁷³⁴ 「はつせ
 山心もそらに成りにけり雲に風まつ春のあけぼ
 の」（詠百首和歌「暁」）。

▽三句切、倒置法。桜の山の春曙は、全体とし
 ての、まがわなない雲も美しく照り輝くことだろ
 うと現在推量する。同じ定家に③ 133 拾遺愚草²¹⁶⁵
 「おほかたの春にしられぬならひゆゑたのむ桜
 もをりや過ぐらん」（下、春「返し」）がある。

② 16 夫木¹¹⁴⁹、春四、花「秀能すすめ侍りける五
 首歌」前中納言定家卿、第三句「…らん」。

全歌集「参考」・① 8 新古今¹⁵⁷ 「はつせ山うつ
 ろふ花にはるくれてまがひし雲ぞ嶺にのこれ
 る」（春下、摂政太政大臣）、秀能勸進五首の詠
 出年次は未詳。おそらく承久の乱以後か。」

「類歌」① 13 新後撰 76 「山たかみかさなる雲の
 しろたへにさくらもまがふ春のあけぼの」（春
 下、平貞時）…²⁰⁵⁹ に近い

⑤ 184 老若五十首歌 59 「山のはもうすくれなゐ
 の花盛雲にまかせぬ春の明ぼの」（春、寂蓮）。

② 16 夫木¹³⁹⁶